ポスト・ソヴェト期のベラルーシ史学（1991-2004 年）
—16 世紀のベラルーシの発展をめぐってー[1]

アンナ・L・ホロシケヴィチ

ソ連邦の崩壊と新しい独立諸国家の成立という事態に伴って、ロシアにおいても、ソヴェト以後の新生諸国家においても、歴史学におけるきわめて本質的な変化が生じている。

そうした変化には新生国家ごとにそれぞれ「ナショナル」な特徴がみられる。何よりもまず研究テーマに変転があった。ロシアではまず教会史、それも第一に正教会の歴史、さらにロシアを統治した王朝、リューリク王朝とロマノフ王朝の歴史が前面にでている。ロシアの隣接国、とくに西部および南西部の隣国にとって最も重要性をもつようになったのは、ルーシ、全ルーシ公国（国家）、ロシア・ツァーリ国、ロシア帝国と変化していったロシアとの相互関係の歴史[2]、さらに固有の自国の国家史の研究、あるいは国家が存在しなかった場合には民族の伝説的・神話的人物形象をつくりだすことなどである（ウクライナおよびベラルーシの歴史学におけるいくつかの傾向にこうした特徴がみられる）。しかしこれら新しい神話的テーマとならんで、ごく理性的な歴史観も生まれてきている。ベラルーシの歴史学においては、リトアニア大公国の外交史研究にそうした傾向をはっきり見ることができる。A. N.ヤヌゥシケヴィチは、16 世紀にはベラルーシにおけるネーションの形成過程はまだ完結しておらず、その自己認識は国家への帰属に基づいていたことを強調している[3]。

ベラルーシ史学の方向転換

20 世紀末から 21 世紀初頭の国家的自立時代に入ったベラルーシにおける歴史研究の方向転換は、1917 年以前および 20 世紀 20 年代のポーランド、リトアニアならびにベラルーシの歴史学の成果の吸収を同時進行させた。その過程は3つの形をとって進んだ。年代的に最初の形は先行研究の成果の大衆化・啓蒙化だった[4]。ソヴェト時代に伝統的だった研究の見直しは、リトアニア大公国の外交官や軍人についての半ば啓蒙的、半ば研究的な性格の著作から始まったからである（オスタフイ・ヴォロヴィチやレフ・サペガを対象にした I. A. サヴェルチェンコの本、コンスタンチン・オストロジスキに関する G. N. サガノヴィチの本などがそれで、すべて 1992 年の出版）。これに学問的な著作（1999 年に出版されたミハイル・ボゴヴィチノヴィチ・ボグシを対象にした V. I. コノノヴィチの本[5]）も続いたが、これはポーランド的な歴史・伝記的研究の伝統に沿って行なわれたものだった。もっとも I. グラリャの最新の学問的な仕事はベラルーシでは、どういうわけかさっぱり評価さ

---

[1] この論文の執筆にあたって A.H. Янушкевич から多大な援助をいただいた。17 世紀末までのリトアニア大公国の対外関係史に関する基本文献目録や、今日なお未刊行の博士候補論文のテキストを提供していただいた。氏の寛大な協力なしにこのテーマに関する仕事は不可能だったろう。Л.Е Горизонтова （モスクワ）とA.B. Морозова （ミンスク）の協力により組織された学会に参加し、2004 年8月 16-25 日にミンスクに滞在しており、筆者は B.A. Воронина, Г.Я.Голенченко, А.И. Груши, B.C. Менжинского, Г.Н. Сагановича の助力で「即席の」文献目録を利用することができた。この方々に衷心からのお礼を申しあげたい。

[2] 本論の中心テーマもまさにこの問題におかれている。

[3] Янушкевич А.Н. Першая інфлянцкая вайна 1558-1570 гг. і яе уплыу на развіцце сацыяльна-палітычных працэсау у Вялікім княстве Літоускім.Мінск, 2001. Заключение（A.H. ヤヌゥシケヴィチ『1558-1570 年の第一次リヴォニア戦争とリトアニア大公国におえる社会経済過程へのその影響』ミンスク、2001 年、結論）.

[4] B.И. Бобышев はポーランド人およびロシア人研究者たちの方法的基盤は批判的分析の対象でもあるが、同時に国際関係の研究分野で独自の伝統を創造していくための基盤でもあると考えている（Бобышев В.И. К вопросу изучения международных отношений в Восточной Европе XVI в. в белорусской историографии // Внешняя политика Беларуси в исторической ретроспективе. Материалы международной научной конференции 24-25 мая 2002 г. Мн., 2002. С. 13）。

[5] Кананові́ч У. Богуш Міхал Багавіцінавіч -вялікакняжацкі дыпламат Жыгімонта Старога // Штогоднік. Інстытут гісторыі Нацыянальнай Акадэміі навук Беларусі. Мн., 1999. С. 31-39.

れないままにされている。ベラルーシの歴史家たちの半啓蒙・半学問的な仕事とならんで、ホーランド人の著作[6]で、特にアレクサンデル大公(1492-1506)とイワン3世の娘エレーナとの婚姻同盟、あるいはジグムント1世老王(1506-48)とミラノ公の娘ボナ・スフォルツァの結婚同盟など、16 世紀の国際関係に直接結びついた著作の翻訳などもあっさりと出版された[7]。

第二の形は、20 世紀末から 21 世紀初めの歴史家たちによる昔の(ソヴェト時代の歴史家には受け入れられなかった)研究[8]、あるいは出版されなかったベラルーシやリトアニアでの研究(特に対外関係に関するあらゆる形の膨大な情報を含んでいる「リトフスヤカ・メトリカ」[9]の歴史に関する研究)が参入しはじめたことである[10]。

第三の形は、高度に史学史的な著作で、あまり数は多くないが主として対外関係史に関する研究展望的な論文である。そのうち特にあげておく価値があるものとして、 V. I. ボブィシェフの研究、同じくボブィシェフや O. ヤノフスキーや A. N. ヤヌゥシケヴィチなどの仕事がある。ボブィシェフとヤヌゥシケヴィチの仕事はベラルーシ史学に関するもので、前者は 16 世紀東欧の国際関係の一般問題を扱っているが、後者は 14-18 世紀リトアニア大公国の具体的な対外政策を対象にしている。これらの著者たちもまたポーランドの歴史・伝記的歴史研究に精通し、その方法を使って自分のテーマに接近している[11]。このような著作はみられるものの、史学史的な潮流はおそらく非常に微弱である。ベラルーシ歴史学を含むソヴェト時代の伝統に対する批判的評価は多少みられるとしても、今日までソヴェト時代のロシア語で書かれた著作の真剣な分析はされてこなかった。ソヴェトの歴史学(本論文が取り上げているような研究テーマはそこでは決して優先課題ではなかった)は恥ずべきことに、いつも「兄弟民族」と呼んできたベラルーシの国民が、モンゴル征服以前のルーシの全土に対する自己の権利を主張して争ってきた東欧の2大強国、つまりリトアニア大公国(1569 年以後はジェチ・ポスポリタ)とルーシ大公国(国家)(1549 年以後はロシア・ツァーリ国)との間の、血腥い争いの犠牲になってきたことに口をつぐんできた[12]。そのことはまぎれもない事実である。そして 17 世紀初め以後は大ロシアの名で呼ばれるロシアの民衆もまた、自分の「国家」政策の犠牲となり似たような状況に置かれたのである[13]。

---

[6] この中にはポーランド王や王妃、ピヤスト王朝やヤゲイロ王朝の諸王の妻たちのことを書いたエズワルド・ルスキの本も入っている。Ruzski E. Polskie krolowie. Zony Piastow I Jagiellonow. Warszawa, 1985 .

[7] これらの妻たちのことを書いた諸章については抄訳がある。см.: Спадчына. 1994. № 1. С. 55-64; № 2. С. 35-49.

[8] Станкевіч Я. Этнографічныя й гісторычныя тэрыторыі й граніцы Беларусі. New York, 1953. この著作はリトアニア諸公の外交関係にとって非常に重要だったベラルーシやリトアニア大公国の領土に関する「情報」を含んでいる(Там же. С. 18-24)。この書の地図が「現代」の地図に示す民族的境界は次のようになっている。プスコフのごく近くの北側、ポルホフの南側、セリゲル湖湖畔のオスタシコフの東側、ズプツォフ、ヴォロコラムスク、メドゥイニ、カルーガの西側、クロム、ルゴフの西側、コノトプ、キエフの北側で、リューベチやベレスチエの西、セリツォからベリスクおよびクヌィシンを経てリトアニア国境にいたる線の北である。

[9] Даугяла З. Литовская мэтрыка I яе каштаунасьць для вывучэння мінуучыны Беларусі / Прадмова К. Езавітауа // Спадчына. 1997.и№ 4. С.85-95

[10] В. Ластовским など当時の指導的な歴史家たちが開催した 1991 年パリ学会におけるリトアニア・ベラルーシ国家史に関する論考もこの第二の形の部類に加えることができよう(Архівы Беларускай народнай рэспуюблікі. Т.1. Кн. 1. Вилня, Нью-Ерк, Менск, Прага, 1998. № 1170. С. 321-323.)。

[11] Бобышев В. Яновский О. Международные отношения в Восточной и Центральной Европе XVI в, в интерпретации польской историографии // Белорусский журнал международногоправа и международных отношений. 1999. № 2. С. 40-43.

[12] 両国の間のそうした戦争を熱心に数え上げている例として以下を参照されたい。"Гістарычны шлях беларускай нацыі і дзяржавы", подготовленном Вл. Орловым, А. Грицкевичем, В. Кипелем, П. Лойко, И. Саверченко (Мн., 2001. С. 125)

[13] 例えば 1999-2004 年に К. В. Баранов が5巻本で刊行したノヴゴロド土地台帳に反映している状況を参照されたい。

史料の刊行ならびに史料研究

以上のようなことのほか、また歴史学の基礎への回帰が2つの形で進んだ。一つはソヴェト時代には中止されていた諸史料の刊行であり、もう一つは世界中の歴史学の最新の諸成果によって充実し、その方法論も複雑化し深められている史料学的研究である。

ときには相反する方向を向いていることもあるこうした傾向は、ポスト・ソヴェト期のベラルーシ史学を分析すると容易に確認することができる。ヨーロッパ一般の水準に比べて絶望的な遅れをとっていた歴史学は、過去 15 年間のあいだにめくるめくほどの変転を遂げた。それは何よりまず幹部要員の構成に関係している。「党と政府の路線」に沿わせることだけを目的に歴史科学の場に任命されてくる党の専従職員のポストを、専門研究者が占めるようになったのである。近隣諸国の現代の学問水準からの遅れを克服する課題を達成するには、V. P. グリツケヴィチ[14]がはっきり述べているように、十分な時間が必用であり、教育の改革や、しかるべき専門家たちの育成が不可欠である（とはいえこの方向の活動の成果が現在の時点ですでに感じとれている）。新世代の歴史家たちの専門的な育成という点では、ヨーロッパのどの国の歴史家をとってみても羨むべき状況にある。古代諸語（ラテン語、古ベラルーシ語、ウクライナ語、ロシア語を含め）の知識は、古文書学その他の補助学ディシプリンの修得と組み合わせて獲得されているし、その結果として方法論も完成し、史料学が花開き、古文献学が高揚する前提が生み出されている。

史料的基盤の拡大のテンポは残念ながらかなり緩慢である。重要史料として第一にあげなければならないのは、V. S. メンジンスキーと A. I. グルシャの手になる『リトフスカヤ・メトリカ』の Knigi Zapisi の2巻（1522-1552 年の第 28 巻および 1559-1566 年の第 44 巻部分にあたる）の刊行である。このなかにはリトアニア大公国の国内史にかかわる諸文書とともに、同国と周辺諸国（クリミア・ハン国、全ルーシ大公国、モルダヴィア）との外交関係やベラルーシ地方を舞台にしたもろもろの戦争史にかかわる史料も含まれている。リトフスカヤ・メトリカ第28巻のこうした資料の性格づけを与えたのはV. S. メンジンスキーである[15]。彼が記しているように、この巻は通行安全保証状や外交委任状から条約文（dogoborov-shertej）まで実に多くの種類の文書を含んでいる。文書のなかには、外交関係がリトアニア公国内の都市の発展に直接の影響を与えたことを示しているものがある。外交使節が往来する街道沿いの都市の発展、とりわけオルシャの発展がそれである。

新史料の刊行と同時に外交政策にかかわる文書の翻訳も進行した[16]。このテーマの個々の側面を研究するのに、M. ジャルキフや O. E. プロツェンコは外国人（ジギスムント・ヘルベルシュタイン、ミハロン・リトヴィン、レインホルド・ヘイデンシュタインなど）の記録を援用している。A. A. セメンチュクはポーランドの年代記作者 M. ストルィコフスキの伝記のリヴォニア戦争時代の部分を復元した。むろん外交儀礼（プロトコール）の問題も取り上げられた。現代の研究者たちは外交史の資料に、文書学をふくめ最新の方法論を応用しようとの試みも行なっている（O. I. ジャルノヴィチ，V. I. コノノヴィチ[17]）。外交上の往復書簡の儀礼の一般的な特徴を明らかにしたのは A. A. ヤノフスキーで、彼は全ルーシ大公ないロシア・ツァーリの書簡もジェチ・ポスポリタ側の君主の書簡も、実際的な軍事状況に応じてそのトーンやニュアンスが変化していったことを

---

[14] Грицкевіч У. [П].Як пераадолець адставанне гістарычнай навукі Беларуси? // Беларусіка-Albaruthenica. Мн., 1993. С. 100-104.

[15] Менжинский В.С. Дыпламатычныя дакументы кнігі Метрыкі ВКЛ № 28//Беларусь I свет. Альманах. Т.II. Мн., 2000. С. 15-21).

[16] とくにはポーランド王ジグムント老王の神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世への書簡を刊行し、この書簡を使節の外交上の口上のアクトならびに覚書の「萌芽」と規定している。しかしこの文書は外交上の指令尾書（全ルーシ大公国の習慣では使節への「指示文書ナカズナヤ・パミャチ」）と規定するほうが正確であろう。著者も推定しているように、これは 1518 年にアウグスブルグにおける神聖ローマ皇帝との交渉で使節が読み上げなくてはならなかったテキストだからである。

[17] ただ彼らがこうした方法を援用しているのはより初期の時代の材料である。Канановіч У.I. Appellatio у дыпломатычным фармуляры канца XIV-першай паловы XV ст. // Беларусь і свет. Альманах. Т. I. Мн., 1999. С. 12-18.

克明に追跡している[18]。ヨーロッパと共通の性格を帯びていたモスクワおよびリトアニアの外交儀礼の類似性と違いについて、また両者がもっていた東方的ならびにヨーロッパ的な伝統についてはI. V. ツァリクがいくつかの指摘を行なっている。この著者が強調しているのは、ポーランド王冠には常設的な駐在使節制度が存在したのに対し、モスクワ国家の慣習にはこれがなく、外交は「臨時使節」主義の特徴をもっていたという点である[19]。

一連の著作ではさまざまな種類の史料の性格規定が行なわれている[20]。その第一は叙述的な記録である[21]。とりわけ注目を引いているのがいわゆる「ちらし・ビラ(летучие листки)」[22]である。ベラルーシの歴史家たちの関心を特に引きつけているのが、リヴォニア戦争に関するもの、特にポロツク史に関係している「ちらし」である。たとえば A. ベルィは 1563 年のツァーリ軍によるポロツク占領と 1579 年のリトアニア軍による占領に関する叙述を Викиан コレクションのビラから紹介している[23]。画家の中世ベラルーシの都市についてのイメージが明らかに貧弱だったからであろう、ツァーリ軍によるポロツク占領の叙述はかなり図式的であるのに対し、イワン4世の軍隊からのポロツク解放の叙述には写実的な細部が豊富で、A. ベルィの意見によれば Похоловецийの著名な銅版画と撞着することもなければ、記録諸史料と矛盾することもなく[24]、視覚的な具体的情報によりこれらを補ってくれる。R. マクシモヴィチの観察によると、オクスフォード図書館の 1684 年の Бодлеянской 一覧によって知られている、ベラルーシで印刷された同様な「ちらし」が存在する。現在それらの「ちらし」の所在地は判明していないが、R. マクシモヴィチの推定によれば、上の一覧が述べているのはラヂヴィル家のニエシヴィエジの印刷所で印刷された「ちらし」である。この印刷所ではすでに 1562 年に『教理問答集』やシモン・ブゥドノイの論考「神の前に罪深き者の免罪について」などを出版している。ほぼ同じ頃の 1563 年にボヘミアにおいてセバスチア

---

[18] Яноускі А.А. "Вайна нервау", ці характар дыпламатычнай перапріскі паміж ВКЛ І Масковскай дзяржавай у XVIст. // Беларусь І І свет. Аліманах. Т.І. Мн., 1999.

[19] Царик И.В. Дипломатический протокол Московского государства и Великого княжества Литовского на рубеже XV-XVI вв. (сходство и различие).

[20] 1998 年にミンスクで開催された史料学の専門学会には、残念ながら国際関係に関わる文書類の分析をした報告はみなれなかった(Гістарычныя крыніцы: праблемы класіфікацыі, вывучення і выкладання. Мн., 23-24 красавика 1998 г. материалы да Міжнароднай навукова-практычнай канференцыі, прысвячанай 120-годдзю з дня нараджэння У. І. Пичэты. Мн., 1998)。とはいえ、国際関係文書のなかに通関税台帳や関税台帳の検討(Каун С.Б. Мытные и таможенные книги ВКЛ и России XVI-XVIII вв.: результаты сравнительного анализа// Там же. С. 88-89)リトフスカヤ・メトリカの分析(Галенчанка Г.Я. Метрыка Вялікага княства Литоускага: гісторыя і стан захавання; Галубовіч В.У. Некаторыя заувагі адносна кнігі № 85 метрыкі Вялікага княства Літоускага// Там же. С. 125-126; 126-127)、初期のものであるがリヴォニア文書()Жлутка А.А. Лівонскія дакументы і адлюстраванне у іх гістарычных падзеяу на беларускіх землях у XIII-XIV ст. // Там же. С.132-133) 、さらにБ. Ваповский の年代記(Михайловская Хроника Бернарда Ваповского как исторический источник // Там же. С. 166-167)なども含めるとすれば、展望はそれほど暗いものではない。

[21] Сагановіч Г. Беларусь в інфлянцкіх хроніках XIII-XVI ст. // Спадчына, 1996. № 5. С. 52-57.国際関係に著しい注意を向けているポーランドの年代記作者たちのことを扱った A.A. Семенчук の一連の論文を特にあげておく必用がある。ポーランドの年代記作者とは具体的には Стрыйковский や Мартина и Иоахим Бельских である(Семянчук А. Мацей Стрыйкоускі у Вялікм княстве Літоускім// Спадчына. 1995 № 1; Она же. Удзел Мацея Стрыйкоускага у Інфлянцкай вайне//Castrum, bellum et urbis. Баранавічы, 2002; С. 342-348; Она же. Марцін і Яхім Бельскія- гісторыкі Польшчы і Вялікага княства Літоускага // Спадчына. 1991. № 1. С. 26-47.)。А. Гваньиния の簡単な伝記とその紋章の刊行を行なっているのはベラルーシの著名な紋章学者の А. Титову である(Ціоу А. Кароткі летапіс пра летппсца // Мастацтва. 1993. № 8. С. 64-65)。

[22] Kappeler A.

[23] Белы А. Полацк у нямецкіх "лятучіх листках" XVI ст. // Спадчына. 1997. № 6. С. 213-216.

[24] Там же. С. 217. 彩色された銅版画は上記の雑誌の裏表紙に色刷りで復元されている。

ン・オクサが同じ題名の出版を準備していた。そのことはタイトルを比較すれば読者は得心がいくであろう。

1562年(?)のベラルーシ語版	1563年のチェコ語版
Новіны грозные а жалостлівые о нападе *княжаті Московского* Івана на землю рускую, которі то князь *паленьем*, тыранством, *мордованьнем, мест, замков добываньем веліку і знаменіту шкоду вчыняет.*	*Novinyhrozne, straslive I zalostlive,* kterak Neptalim velike *knize Mozkovske* Jeho Milosti krali polskemu atd. s znamenitym poctem lidu valecneho do zem litevske vpadl, *palenim, mordovanim* lidu obojiho pohlavi, nekrest'janskym a nestydatym zajimanim, *mest a zamku dobyvanim, velikau znamenitau skodu ucinil.*
З доданьем реляцыей его Мілості гетмана ВКЛ княжаті Радзівіла о поражцы места Полоцкого, 1562	Vytisteno v Starem meste Prazskem u Sebastiana Oksa s Kolovsy. Leta atd. LXIII.
Второй лист: Новіна іста а правдіва о добытьі тыраном московскім места Полоцкаго. 1571.	

ベラルーシ語版はロシア・ツァーリ国の首長の名を正確に書いているが、チェゴ語版はドイツ語版と同じで聖書にでてくる暴君ネフタリムの名で呼ばれているだけである。リヴォニア戦争時代の西欧の政治評論文献ではこの名でイワン雷帝をさしていた。他方ベラルーシ語版は年代記述が不正確であるのに対し、チェコ語版は正確だという対照性もある。要するに、チェコ語版は同じ 1563 年のドイツ語版の「ちらし」との相似性を示しており、またポーランド語によるオリジナルとの相似性をもっているということである。

また経済関係の若干の資料を含む史料に遺言状がある。ヴィリニュスの総督ヤン・グレヴォヴィチの 1590 年 7 月 28 日付けの遺言状[25]の翻訳には、コロレヴェツ(ケーニッヒスベルク)やリガにおける彼の取引相手が自分の死後、妻に債務返還の請求をしてくる可能性について述べたあと、自分に対する唯一人の債権者(1589 年)としてコロレヴェツのヴァルテンシュタイン某の名があげられている。ヤン・グレヴォヴィチがリヴォニアやプロシアにおいて取引相手と行っていた信用取引は恒常的な性格を帯びていたと思われ、それは 17 世紀リガにおける信用取引の慣行と完全に符号している[26]。リトアニアの穀物の再輸出を専門に行なっていたリヴォニアの商人たちは、ジェチ・ポスポリタやロシア・ツァーリ国における自分の穀物供給者に翌年の収穫を見込んで前もって前金を支払っていた。リトアニア大貴族[27]やシラフタたちによる対外交易のデータとの関連でとりわけ説得力があるのは、リトアニア大公国がリヴォニア領有に経済的関心を寄せていたというA. N. ヤヌゥシケヴィチの主張である。リトアニア大公国は 1552 年からリヴォニア領有の企図はあらわにしていた[28]。

対外交易については間接的ながら、ポロツクの市長(ブルミストル)ダヴィド・パンコフの 1559 年の遺言状が証言している。

---

[25] Тастамент Яна Глябовіча, ваяводы троцкага /Паслясслоуе, переклад і публ. А. Уначака // Спадчына. 1993 № 1.

[26] Дорошенко В.В. Торговля Риги в XVII в. Рига, 1985.

[27] 残念ながら16世紀から17世紀前半のラジヴィール家の関するミスクス・フォンドには対外交易に関する資料は存在しなかった((Каляга А. Крыніцы па эканамічнай гісторыі гарадоу Беларусі XVI-першай паловы XVII стст. у фондзе князеу Радзівілау НГАБ у г. Мінску // Беларускі горад у часе і прасторы; 500 гадоу Полацкай магдебургіі. Мн., 2001. С. 243-244)

[28] Янушкевич А.Н. Першая інфлянцкая война. Разд. 1

ポロツク都市貴族の代表的人物だった彼は、その遺言状（テスタメント）に 16 世紀の東欧に出回っていたイギリス、フランドル、オランダ製のあらゆる種類の輸入織物およびその製品を列挙している[29]。

以上のように、1991-2004 年の間にはベラルーシ史の史料的基盤が著しく充実したと言えるほど多くの史料が刊行されたわけではないが、しかしその展望にはこの国の古文書研究の新段階が始まったと言っていいだけの広がりが見られる。

研究テーマの変化

テーマに関して言うならば、私の見る限りその変化は一様ではない。ソヴェト時代の空間範囲に成立したロシアを初めすべての国々に共通して見られることであるが、一方では社会経済的な発展の研究が後景に退き（むろん例外はあり、この点は後述する）、東方の隣国（アジア諸国の場合には北西の隣国）つまりロシアとの相互関係の問題が前面に押し出され、他方では自国の過去の神話化の社会的要請が顕在化していった[30]。ベラルーシの新しい政治的エリートたちの要請に応え、過去の神話化の課題で非常な成功をおさめたのが、リトアニア大公国の国家創設時代を対象にした M. I. エルモロヴィチの似非学問的な新説である。とはいえ 16 世紀ベラルーシを対象にした学問的な研究においても、現代のこの民族的、政治的神話学の影響を避けて通ることは出来なかった。16 世紀は多くの点でこの国の運命の転換点でもあったからである。ベラルーシ領域を舞台にして行われた戦争の数だけでも思い起こしておく必要があろう（16 世紀の第一・三半期に3回、第二・三半期にも1回、そして 16 世紀の後半には最も長く、かつ非常に過酷な戦争が1回行われた）。そしてロシア・ツァーリ国とのリヴォニア戦争に煽られて結ばれたという側面をもつルブリン合同は、リトアニア大公国の状況のみならず、その版図内にあったベラルーシ地方の状況を根本的に変化させるものだった[31]。これらすべてのことが、リトアニア大公国およびベラルーシの対外関係史の神話化に根拠を与えることになったのである。

ここで政治的・地理的な用語の問題について一言のべておこう。1569 年にルブリン合同条約が結ばれはしたが、この合同で領土を縮小させたリトアニア大公国はなお一定の自立性を失ってはいなかった。そのことは裁判活動や立法の分野を見るだけで十分明らかである。1566 年に採用された第二リトアニア法典は2年後に改良され発効した。それゆえ 16 世紀の後半にも、なおこの国家の自称が実際的な意味を失っていなかったのは当然だった。だが東方の隣国の状況はこれとはまったく異なっており、この国の政治構造は改造され、その名称も急速に変化した。すでに 15 世紀の末にウラジーミル大公国とモスクワ公国は全ルーシ公国（国家）に転化し（歴史家たちはこの転化が生じたのはノヴゴロドを併合した 1478 年の後のことか、それともトヴェーリを併合した 1485 年以後かで論争している）、1547 年にはイワン4世のツァーリ戴冠によりロシア・ツァーリ国となり、1589 年の総主教座確立のあとはロシア・ツァーリ国に「大」をつけて自称するようになった。しかしベラルーシ史学では、ポーランド史学と同じ「モスクワ国」（モスクコフスカヤ・ジェルジャヴァ）という用語を一貫して用いている。この呼称は 15 世紀末のポーランド人のある著者の筆から生まれたもので、すでにベラルーシへと変化し、あるいは変化しつつある地域も含め、モンゴル征服以前のルーシが包含していたすべての土地に対してリューリック王朝出身の君主が主張する要求権を否定するものだった。残念なことに、ベラルーシの同僚たちは、東方の隣国の呼称に関するポーランド的伝統を無批判に採用しているのである。

---

[29] Воронін В.А. Тэстамент полацкага бурмістра Давыда Панкова 1559 г. // Матэрыялы IV Міжнароднай навуковой канферэнцыі. Полацк, 2003. С. 32-40

[30] ベラルーシ歴史学の発展および権力機構がそれに与えた作用についての全体的な特徴については、長くこのテーマに取り組んできたリンドネル（Линднер Р. Нязменнасць і змены у постсавецкай гістарыяграфіі Беларусі // Беларусь паміж усходам і захадам. Праблемы міжнацыянальнага, міжрэлігійнага і міжкультурнага узамемадзення, дыялогу і сінтезу. Ч.1 Беларусіка- Albaruthenica. 6. Мн., 1997. С. 113-118）が 2003 年に提示している。ベラルーシ語で出版されたリンドネル（R. Lindner）のこの著作（Линднер Р. Гісторыкі і улада. Нацыятворчы працес і гістарычная палітыка у Беларусі XIX-XX ст. Мн., 2003）は特考察の対象とする必要がある。

[31] A. N. ヤヌゥシケヴィチの見解によれば、リヴォニア戦争が「ポーランドとの一体化のプロセスを促進した」のである。

リトアニア大公国とロシアとの関係は16世紀を通じて善隣関係とはほど遠いものだった。最初に16世紀初めのルーシ＝リトアニアおよびロシア＝リトアニア関係に目を向けよう。V. I. コノノヴィチは1997年に、「リューリック王朝の遺産をめぐる戦い」の始まりについて一般的な特徴づけを行ったが、この戦いはB. I. シドレンコの言によるなら「人為的に創作された…ヴォッチナ的王朝理論」[32]を根拠にして行われたものだった。V. I. コノノヴィチはこの戦いの初期段階の開始を1449年としているが、これは正しい。この年にワリーリイ2世とリトアニア大公にしてポーランド王たるカジミル・ヤゲロン［ガジミエシ・ヤゲロンチク］との間で条約が締結されたのであるが、彼はこの条約を「ルーシをヴィリニュスとモスクワの間で分割した重大な文書」であるとし、東北ルーシにおける封建戦争の最中という条件下で締結されたこの文書を立脚点に、1449 年以来リトアニア大公の保護下におかれていたトヴェーリをモスクワが併合したことを非合法と非難する。東欧の地図にすでに変化が生じていた15世紀末には、リューリックの末裔たちに帰属する土地問題だけでなく、イワン3世の称号問題ももちあがった。V. I. コノノヴィチは私の見解にしたがい、リトアニア大公国と全ルーシ公国との間で称号問題が発生した年を1499年としている。ただし、イワン3世が最初に「全ルーシの君主」を名乗ったのは1494年のことだった。もっと後になると、戦争のイニシアティブはアレクサンデル・カジミロヴィチからイワン3世やその後継者ワシーリイ3世に移った[33]。16 世紀初めの3つロシア・リトアニア戦争の歴史についてベラルーシの歴史家たちは特別の注意を払っていない。ただ相互の領土的な安全に対する小規模な違反だとか、国境地域の商人や住民に対する略奪などに関連した両国の関係については、B. I. シドレンコが十分な根拠づけを行いながら研究している。彼はまた国境を 15 世紀の状態に戻そうとするもう一つの試みであるスタロドゥブ戦争にも注意を払っている。しかしこ冒険的な戦争は何の成果もあげずに終わった。そしてリトアニア軍の栄光を付け加えることが出来なかったために、B. I. シドレンコのこの論文はベラルーシ愛国史学のなかで孤立を余儀なくされた[34]。

戦争の歴史で最も大きな関心を呼んだのは 1564 年のウッラ近くでの戦闘、つまりポロツク喪失に対するリトアニア側の復讐戦だった[35]。この戦闘に関する一つの論文が、現代ベラルーシ史学のルーシ・リトアニア戦争評価における転換点になった[36]。ウッラでの勝利は1514年のオルシャでの勝利と同じく、15 世紀の全期間を通じて形成された領土の維持のためにリトアニア大公国が払った努力に特別の重要性をもたせるものであった。オルシャの戦いに関して記しておく価値があるのは、ベラルーシ史学がロシア史学に先立って1514年のオルシャの戦闘における「モスクワの」捕虜の運命に注意を払った事実である[37]。このようなテーマの選択の仕方は（何よりリトアニア大公国が勝利した個々の戦闘や勝利をもたらした戦争への関心がつよい[38]）歴史家たちの一般的気分をよく反映している。

---

[32] Сидоренко Б.И. Земли Восточной Беларуси в дипломатии Великого княжества Литовского и Московского государства первой трети XVI в.// Беларусь і свет. Альманах. Т.I. Мн., 1999. С. 58.

[33] Кононовіч У. Змаганне за спадчыну Рурыкавічау // Беларуская мінуушчына. 1997. № 5 С. 2-7.

[34] Сидоренко Б.И. Земли Восточной Белоруссии... С. 58-67; Сідарэнка Б.. Магілеу у сістэме узаемаадносін (взаимоотношений- АХ) Вялікага кнства Літоускага І Маскоускай дзяржавы XVI в. // БГЧ. 1994. № 3. С. 30-35.

[35] Грицкевіч. А. Бітва пад Оршай Грыцкевіч А. Бітва каля Улы // Беларускі гістарычны часопіс. – 1994. – № 3. – С. 91-92

[36] Янушкевіч А. Першая інфлянцкая вайна 1558-1570 гг. … Мінск, 2001

[37] Кошалеу М. Живыя І мертвыя: маскоускія вязні пасля аршанскай біпвы 1514 г. // Гісторыка-археалагічны зборнік. Мн.,1998. № 13 С. 176-183

[38] 例えば 1506 年のクレツク近郊での戦闘（実際この戦闘はクリミア・ハン国との関係において非常に重要な意味をもっていた）については一連の仕事があり、復元された史料もある。V. A. ヴォロニンは戦闘の場所と経過を検討している。同じこ

16 世紀初めの戦争(A. P. グリツケヴィチ、V. シェイフェル)とならんで関心の中心に置かれているのは、当然のことであるがリヴォニア戦争であり、それも特に戦争の開始と初期の時代についてである(ヤヌゥシェヴィチ、ボブィシェフ、サガノヴィチ[39])。問題に入る前にこの戦争の呼び方について一言述べておこう。ソヴェト時代のロシアおよびベラルーシの歴史学とは対照的に、現在のポスト・ソヴェト時代のベラルーシ史学においては、「インフランティ」戦争という呼称が次第に固まりつつある。もっとも、ロシア式の呼称をポーランド式の呼び名に変えたことに特別の意味はなさそうに思われる。戦争の目的の問題も再考察の対象になっている。とりわけ注目すべきは、A. N. ヤヌゥシケヴィチの示したリヴォニア戦争理解である。この戦争は 16 世紀における諸戦争のうち、その軍事行動がリトアニア大公国の領土内だけでなく、リトアニア大公国とロシア・ツァーリ国という膨張主義的な国家間の軋轢に巻き込まれた他国の領土、つまりリヴォニアにまで広がった最初の戦争だったと彼は述べている。当然、戦う両者の目的もそれ以前の戦争とは違っていた。リトアニア大公国はこの戦争でモンゴル来襲以後に自国に編入された諸地方の保全を目指し、他方、全ルーシ公国はモンゴル以前のリューリック王朝領土の復活を企図していたからである。リヴォニア戦争ではまた、リトアニア大公国に属さない領土の領有こそが戦争の目的になっていた[40]。

ベラルーシの別の歴史家 V. I. ボブィシェフは国際間の状況、国の人口密度(しかし住民数やその密度を対外政策が防衛的か拡張主義的かの性格に直接結びつけようとする方法は幾分こじつけに見える[41])および対外政策の評価を行っている。国の内的発展に関して V. I. ボブィシェフが述べているのは、「大貴族評議会」(パンのラーダ)への権力の集中のプロセスや、1563 年以来東方正教徒に対する差別は存在しなくなったという点である。しかし彼はそのことを東方および北東の領土の保全という対外政策の課題と結びつけて議論してはいない。V. I. ボブィシェフはまた 1550-1556 年に王室官房長官だったニコライ・ラジヴィル・チョールヌィの外交について、ポーランドの歴史家 P. ゼレフスキが与えた低い評価に同意しているが、その低い評価の理由はロシアとクリミアとの対立を利用した政治策動を行わなかったことや、リトアニア大公国のロシアによる危険性を過小評価したという点に置かれていた[42]。問題をもっぱらリトアニアの側からだけ考察するというこの歴史家の態度は、ついには 1556-1557 年のロシア・スウェーデン戦争の時期に、リトアニア大公国の指導者が軍事行動を開

とは全ルーシ公国(モスクワ)に何の得る所もなく終わったスタロドゥブ戦争についても言える。Сидоренко Б. Могилев в войне ВКЛ и Московского государства 1534-37 гг. // Минулая I сучасная гісторыя Магілева. Маг., 2001. С. 42-46.

Так, битве под Клецком 1506 г., действительно, чрезвычайно важной в отношениях с Крымским ханством, посвящена серия работ. Воспроизведены некоторые источники: Воронин В.А., обсуждается место и ход битвы) То же можно сказать и относительно завершившейся бесславно для Княжества всея Руси Стародубской войны (Сидоренко Б. Могилев в войне ВКЛ и Московского государства 1534-37 гг. // Минулая I сучасная гісторыя Магілева. Маг., 2001. С. 42-46: Он же.

[39] G. N. サガノヴィチはこの戦争のうち特に 1563-1579 年の時期、地理的な範囲としてはポロツク地域をとりあげて研究している(Сагановіч Г. Полацкая вайна 1563-79 // Адражденне. Т. 1. Мн., 1995. С. 61-82.Работа осталась недоступной автору данного обзора)

[40] この点は兵員配置の数値をみると一目瞭然である。A. N. ヤヌゥシケヴィチの計算によれば、兵員総数 12 万人のうち 10 万5千人がリヴォニアに配置されていた。東部戦線における兵員数は 1 万人から 1 万 6 千人の間を変動していた(表 6 および表 7)

[41] Бобышев В.И.Международное положение и внешняя политика Великого княжества Литовского накануне и в начале Ливонской войны // Старонкі гісторыі і культуры Беларусі. Мн., 1997. С. 44-45.

[42] Там же. С. 49.

始するが遅すぎたといって非難するまでになる[43]。1559 年に反ロシアのクリミア・リトアニア同盟が締結されてようやく、リトアニア大公国はロシア＝リヴォニア関係に積極的に介入できるようになり、リヴォニア騎士団長 G. ケトラーとの間でリヴォニアがリトアニア大公国の保護下に入るという条約を結ぶことが出来た。その条約により大公国はリヴォニアに若干の土地を受け取ることになった。だが 1559 年のヴィリニュス合意はリヴォニア騎士団の存続に終止符を打ちはしたが、この研究者の意見によるなら、リヴォニアをめぐって争う諸勢力の相互関係に変化を与えることはなかったという[44]。

ロシア史家の視点からみて少しく奇妙に思えるのは、リヴォニア戦争を幾つかの異なる「戦争」に区分する考え方や[45]、16 世紀の 70 年代にリトアニア大公国が敗北を蒙ったという意見があることである[46]。A. N. ヤヌゥシケヴィチは 1558-1570 年の間の軍事行動だけを特別に区別する。リトアニア大公国にとってリヴォニアをめぐる戦争は続いていたが、スウェーデンというこの地域に対する別の権利要求者に対する戦いであった事実でこの区別を根拠づけるのである。17 世紀の初めにジェチ・ポスポリタはさらに2つのリヴォニア戦争を行っていたとする。

リヴォニア戦争の本質を2つの侵略国たるジェチ・ポスポリタとロシア・ツァーリ国が、自国の経済発展のため切実な必要性を感じていたリヴォニア領の領有をめぐって争った戦争だった、とするベラルーシの歴史家たちの新しい理解に関して言うなら、この理解はソヴェト時代も含めこれまで我が国の歴史学や外国の歴史学にあった理解とは明確に異なるものであり区別しておく必要がある。

V. I. ボブィシェフはこの国の第一次および第二次空位時代（1572-1576）におけるリトアニア大公国と「モスクワ国家」との関係を研究している。彼は 1558-1570 年の間に両国がとっていた戦略や戦術の違いを強調する。この時期を通じてジェチ・ポスポリタは受け身の防衛戦を遂行し、この方針を捨てロシア・ツァーリ国の領土を目ざした戦いに転換したのはステファン・バトゥーリの治世だったとする。

第二次空位時代の事件およびイワン雷帝のよる王位奪取の試みは、V. I. ボブィシェフによればロシアの内政にも影響を及ぼした。シメオン・ベクブラトヴィチへのツァーリ称号の移譲という道化芝居を、彼はイワンがツァーリ位と王位との同等性を否定する意図に結びつけている[47]。19-20 世紀の諸文献からも知られている通り（特に B. N. フローリャの著作の重要性を強調しておきたい）、リトアニア側の複雑な外交的策謀はツァーリに成功の余地を残さなかった。まして隣国ロシアの首都を占領しようとしていたステファン・バトゥーリの治世となれば、その可能性は一層小さかった。この計画の達成を妨げた事実はいくつもあったが、なかでも V. I. ボブィシェフが特出しているのはスウェーデン人によるナルヴァ、イワンゴロド、コポリエ、ヤマの占領である[48]。

またいわゆる地域史研究の著者たちも、リヴォニア戦争の最終段階の歴史に触れている。例えば B. I. シドレンコは、基本的には「モギリョフ問題」を重視する立場から、M. カトィリョフ・ロストフスキーおよび D. フヴォロスチニンによる 1581 年夏のドニエプル遠征を考察している。モギリョフの役人（ボイト）であるマルチン・ストラヴィンスキーがステファン・バトゥーリに宛てた書簡（「リスト」）に基づいて、シドレンコはツァーリ軍の 1581 年夏におけるスモレンスクからモギリョフまでの遠征経路を復元している。騎兵はオルシャからドニエプルの右岸を進み、歩兵はドニエプルを船で進んだ。ツァーリ軍は都市（オル

---

[43] Там же. С. 51.

[44] Там же. С. 55.

[45] ジェチ・ポスポリタの内政史から出発するならば、たしかに 1570 年の和平はロシアとの戦争の一定段階の完成を画したというだけでなく、この国の内的発展にも照応していたし（ルブリン合同の締結、王朝の消滅とその後に続く王位空位時代など）、また大公国の対外政策上の地位の根本的な変転にも対応していた。

[46] Бобышев В.И. Взаимоотношения Великого княжества Литовского и Московского государствaа в период inter regnum (1572-1576) // Молодые гуманитарии Беларуси. 1995. Мн., 1995. С. 37-

[47] Там же. С. 43.

[48] Бобышев В.И. Планы Стефана Батория в отношении Московского государства и реальность // Матэрыялы 51-й студэнцкай навукрвай канферэнфыі БДУ (красавік-май 1994 г.). Мн., 1994. С. 55-56.

シャ、コプィシャ、シクロフ、モギリョフ）の占領には一つも成功していない。ただドニエプルの左岸に沿って進んだ帰路には、軍司令官たちはラドムリやムスチスラヴリのポサードを略奪荒廃させている。ペトロの精進期に行われた3日間におよぶ攻撃も、戦争の趨勢に本質的な影響を及ぼすことはなかった[49]。この運のなかった攻撃の様子はモギリョフ在住のシラフタの息子ヤロスラフ・ゴロフチンスキー（彼は 15 世紀末にリトアニア大公国の側に移ったリャポロフスキー一族に属していた）が国王に宛てた書簡（リスト）もほぼ同じように描きだしている[50]。

15 世紀末から 16 世紀初めのリトアニア＝クリミア関係の研究を行っているのは V. I. コノノヴィチである。V. I. コノノヴィチおよび Sh. I. ベクチネエフは、クリミア人の遠征の歴史、クリミア人使節や急使のリトアニア大公国での活動、その使節制度、リトアニア公国在住のタタール人の戦争への参加の問題などに関心を寄せている[51]。1506 年のクレツクの戦いはクリミア・ハン国との関係では非常に重要な歴史的事件だったが、この戦いの記念祭は一連の刊行機会となった。幾つかの史料が刊行され[52]、戦闘の場所と経過が解明され[53]、クレツクのラジヴィル家の運命の問題までが検討された[54]。

研究の対象になっているのは、頻繁に生じ、あるいは長期にわたって続いた戦争、また特にイヴォニア戦争のように長い「中断」をはさんで断続的に行なわれた戦争の軍事行動だけではない。秘密外交団の受け入れだとか、密偵の仕事だとか、要するにベラルーシの外でも（I. アウエルバッハ、I. グラリャ）非常にポピュラーになった研究テーマも対象になっている。V. I. ボブィシェフが主にロシア・ツァーリ国の密偵の方法に注意を向けているのに対し[55]、V. I. コノノヴィチは反対にリトアニア大公国の密偵を研究している[56]。このような手法では両国の側の行動にはさしたる違いはなかった。リトアニア大公国も全ルーシ公国（ロシア・ツァーリ国）も、大使、使節、急使、土地の住民、捕虜などを利用し、「スパイ」（密偵）をあちこちに送り、多くの越境者たちから情報を集めた。リヴォニア戦争の時期には一方の国から他方の国へと越境するという現象は非常に一般的だったのである。

リヴォニア戦争が終結したあと外交交渉の組織に変化があったとする V. I. ボブィシェフの考察も興味深い。それまでの外交交渉は通常は全ルーシ公国ないしロシア・ツァーリ国の首都で行なわれてきた。ツァーリは「国の境」つまり両国の国境地域で交渉を行なうことに同意を与えない場合もあった（1561 年、1566 年、1581 年）。ところがジェチ・ポスポリタに完全な敗北を喫することになったイワン雷帝は、「神と汝（ポーランド王ステンファン・バトゥーリ）の前にかしこみつつ」、初めて自分の使節らをジェチ・ポスポリタに派遣することを余儀なくされた。派遣される外交代表者の地位（大使、使節、急使）はまた、交渉する国での待遇の程度を規定していた。ツァーリ権力は交渉の経過が思わしくない場合、相手国の外交代表団への

---

[49] Сідарэнка Б.І. Магілеу на заключным этапе Лівонскай вайны (Дняпроускі паход Міхаіла Катырева Растоускага Дзімітрыя Хварасцініна летам 1581 года // Магілеуская дауніна. 1994. № 1. С. 6-16.

[50] Набелахау В.И. "Пятровкая масква", ці адзін дзень з жыцця Магілева часоу Лівонскай вайны // Магілеуская дауніна. Маг., 1996. С. 76-80.

[51] Бекцінеев Ш. Татарскія уланы // Беларуская мінуушчына. 1997. № 4.С. 55

[52] Варонін В.А.Два лісты пра бітву пад Клецкам у 1506 г // БГА.Т. 2. Сш. 2. Мн., 1995. С.281-286

[53] Літвін В. Клецкая бІтва // Беларуская мінуушчына. 1997. № 2. С. 17-18; Блінец А. Бітва пад Клецкам // БГЧ. 2000. № 4. С. 28-31.

[54] Кананові́ч У. Клецкія Радзівілы // Беларуская мінуушчына. 1994. № 1-4

[55] Бобышев В.И. Из истории тайной дипломатии Великого княжества Литовского и Московского государства накануне и во время Ливонской войны (1558-1583гг.) // Беларусь і свет. Альманах. Т.II. Мн., 2000. С. 22-33

[56] Кананові́ч У. Інфармацыйна-выведная служба у Вялікім княстве Літоускім у познім сярэднявеччы Castrum, bellum et urbis. S.

「扶持」(食事)を減らすことさえ躊躇しなかった。ロシアでもジェチ・ポスポリタでも、使節団に対する儀仗隊は儀礼的な役割だけでなく、同時に密偵、通報者、上級下級の相手国の外交官に虚報を与える役目などを遂行した。ロシアでは儀仗の活動がどのような報賞を受けたかに関する資料が極端に乏しい。一方ジェチ・ポスポリタでは、オルシャの町の市長(スタロスタ)フィロン・クミタは、この町から送られた正確で時宜を得た情報の報賞として 1579 年 10 月に元老院議員の呼称やスモレンスク総督の初号を与えられた。もっとも、スモレンスは 1514 年以来、大全ルーシ公国(1547 年からはロシア・ツァーリ国)の中に含まれていたという「小さな」事実は無視して「スモレンスク総督」の称号を与えているのではなるが[57]。

A. V. チホミーロフはジェチ・ポスポリタ成立後1世紀間のこの国の外交上の接待や交渉の慣習について論じた論文のなかで、主に 17 世紀前半の資料に基づき、ジェチ・ポスポリタがツァーリの使節を受け入れる場合の特徴について少しだけ触れている[58]。彼は迎接の方法、目的地までの使節への同伴、王の宮廷におけるレセプションの儀式、レセプション列席者の構成、実際的な交渉の仕方、宴会の開催や使節の帰郷の儀礼などを順番だって考察している。しかし東欧における外交慣習の比較史的に全面的に研究する課題はなお将来に残された課題である。

対外政策ならびに国内の社会経済的発展

リトアニア大公国およびベラルーシ地方とロシアとの間の経済関係にかかわるテーマは歴史学の片隅に押しやられてしまった。現在もこのテーマと取り組んでいるのはブレストの歴史家たちだけであるが、残念なことに彼らの仕事はこれまでに刊行された史料だけに基づいている[59]。さらに 16 世紀後半から 17 世紀前半までの期間の経済関係を概観的に考察しているため、それぞれの世紀の半世紀間の交易関係の特質を理解することができない。というのも、16 世紀後半と 17 世紀の前半では、特に東西の接触の密度などの点で違いがはっきり推定できるからである。ただ 16 世紀後半の農民階級の研究と彼らが穀物供給者として対外交易に引き込まれていった状況(特にキエフの市場)についてはやや成功していると言っていいであろう[60]。

非常に実り多い研究の方向を示しているのが対外政策の作用に関する研究、とくに戦争がリトアニア大公国およびポロツク、モギリョフといった個々の地方の内的な発展に与えた影響についての研究である(A.N.ヤヌゥシケヴィチ, B. I. シドレンコ)。

国際関係に関する主たる関心が東の対ロシア関係に向けられているのは事実だが、ポーランドとのルブリン合同やその準備過程が等閑視されているわけではない。ルブリン合同それ自体に対する評価は分かれている。国が非常に深刻な軍事的・政治的状況に置かれているなかで結ばれた両国間の合同は、クリミアによる襲撃やトルコとの戦争の危機からリトアニア大公国を救い、また「〈モスコヴィア〉との戦争を有利な方向に好転させ、ポーランドとともにインフランティ(リヴォニア)に対する宗主権を強化する可能性を与えた」といった見解が述べられる一方[61]、他方ではポーランドによる併合で南部や西

---

[57] Бобышау В.I. Некаторыя аспекты арганізацыі дыпламатычных перамоу паміж Вялікім княствам Літоускім і Маскоускай дзяржавай у другой палове XVI ст. // Беларусь і свет. Альманах. Т. I. Мн., 1999. С. 46-53.

[58] Тихомиров А.В. Порядок приема зарубежных посольств и ведения дипломатических переговороа в Речи Посполитой (2-ая половина XVI-XVII в. // Беларусь I свет. Альманах. Т. I. Мн., 1999. С.19-27.

[59] Харченко О.П. Белорусско-русские торговые связи во второй половине XVI-первой половине XVII веков // Берасцейскі хранограф. Вып.3. Брэст, 2002. С. 259-263.

[60] Харченко О.П. Торговые контакты между городом и деревней в Беларуси во II-ой половине XVI-I-ой половине XVII вв. // Бересцейскі хранограф. Вып. 2. Брэст, 1999

[61] Снапкоускы У. Пра калізіі знешнепалітычных інтарэсау Польскай Кароны і iВялікаго

武の土地を喪失したためにリトアニア大公国の「政治的、社会経済的な潜在的可能性」[62]が奪い去られ、ポーランド王冠が大公国を完全に自己に従属させるというが課題を遂行する前提を作り出した」と主張される[63]。とはいえ、ポーランドによる大公国の完全な従属化という課題は未完成のままだった。単一の政治組織へと統合したはずの2つの国家はそれぞれ外交[64]、財政、戦争および領域的権力の分野で独立性を維持し続けていた。確かに外交の範囲は両者の間で分割されていた。ロシア（ベラルーシの用語法ではモスクワ）・ツァーリ国との関係はリトアニア大公国が分担し、リトアニアの官房副長官レフ・サペガの地位がまるまるその責任を負っていた。これら二つの国家の立場の違いはスウェーデンとの関係で顕著だった。リトアニア大公国はプロシア領が部分的にスウェーデンに譲ることを容認していたが、それに反してポーランド王冠はリヴォニアの保全に固執した[65]。

リヴォニア戦争が北東ベラルーシの発展に及ぼした影響に関してはA. N.ヤヌゥシケヴィチの仕事があるが[66]、この戦争がリトアニア大公国の内的な発展にどのような作用を与えたのか、という問題の答えが出るまでにはまだほど遠いように思われる。A. N.ヤヌゥシケヴィチは「インフランティ」戦争における敗北の原因を一般国民義勇軍の劣悪な軍事組織にあると見ているが、この軍制の基礎にあったのがシラフタ民主制だった。そのためシラフタには軍事改革への関心がなかった[67]。しかし私の見解によれば、16世紀60年代に行われた改革と国民義勇軍制からкварцяная傭兵軍への移行[68]が、リヴォニア戦争初期段階の敗北の結果によるものだったことは明らかである。この改革は国家の財政能力の最大限の努力を要するもので、リトアニアの国庫はようやくのことでこれに耐えた。A. N.ヤヌゥシケヴィチの計算によれば軍隊の維持費用は4倍に跳ね上がった。1566-57年には金1-1.2万枚であったのが1568-69年には4.8万枚に増え、1561年以後恒常的赤字に陥っていた国家財政上の負債はそれ相当する割合で増大した。

このような軍事改革の比較史的な考察にも注目する必要がある。ロシア・ツァーリ国とジェチ・ポスポリタにおける軍事改革の平行性と同時代性は、これら2つの国家の発展コースのより広範囲にわたる比較へと導かずにはおかない。ロシアにおける軍事改革が一貫性を欠き、オプリチニナの導入によって傭兵軍徴募の新しい形態が縮小されたために、ヨーロッパ社会が進んだ発展の基本方向からこの国を逸脱させることになった（ロシア連邦における現代の国民総兵役義務制もその残滓と見ることができる）。他方、ジェチ・ポスポリタにおける傭兵制と装備のよい軍隊への移行[69]はリヴォニア戦争の最終的勝利を保証すると同時に、バルト海を通じたロシアのヨーロッパへの窓を塞ぎ、そのことがロシア・ツァーリ国のその後の停滞

княства у складзе Речы Паспалітай // Спадчына. 1995. № 3. С. 190. В этом отношении автор следует, хотя и не вполне последовательно В.М. Игнатовскому, подчеркивавшему опасность опричнины для Беларуси (Ігнатоускі У.М. Кароткі нарыс гісторыі Беларусі. 5-е выд. Мн., 1991. С.96).

[62] История Беларуси. Краткий очерк. / Отв. ред. М.П. Костюк. Мн., 2002. С. 44.

[63] Снапкоускы У. Пра калізіі знешнепалітычных інтарэсау. С. 190.

[64] Это мнение высказывалось вопреки утверждению М.В. Довнар-Запольского о том, что независимая внешняя политика ВКЛ завершилась Ям-Запольским миром (Доунар-Запольскі М. Гісторыя Беларусі. Мн., 1994. С. 103).

[65] Снапкоускы У. Пра калізіі знешнепалітычных інтарэсау. С. 195-196.

[66] ЯнушкевІч А. Вайна і грамадства і адносіны насельництва пауночна-усходняга памяжжя ВКЛ до палітыкі дзяржаунай улады у перыяд Інфлянцкай вайны 1558-1570 г. // Castrum, urbis et bellum. Барановічы, 2002. С.415-421.

[67] Однако была большая заинтересованность в закреплении своих многочисленных прав, что и выполнил Второй литовский статут 1566 г.

[68] Усціновіч Ю. Фарміраванне І арганизацыя наемных войск Вялікага князтва Літоускага з 2-й паловы XVI ст. да рэформ Стэфанка Баторыя // Castrum, urbis et bellum. Барановічы, 2002. С. 379-382.

[69] Бохан Ю.М. Узбраенне войска ВКЛ другой паловы XV- канца XVI ст. Мн., 2002. С. 258-262.

の前提となった。

貨幣経済の分野でもリトアニア大公国とルーシ・ロシアではある種の現象が同時的に生じていた[70]。16 世紀の貨幣流通については、Sh. I. ベクチネエフがごく一般的で少々簡単すぎる性格規定を与えている。彼はこの時代を 1492-1514 年、1514-1569 年の後まで、16 世紀の第三・3半期の3つの段階に区分し、リトアニア大公国ではこの最後の時代を通じてターレルの機能が増大し[71]ルーブリの役割が減退したとする[72]。ベクチネエフはまた 16 世紀の第一・3半期にはカラベリニク(イギリス金貨)が使われていたことを示すいくつかの情報を引いている[73]。後にこのカラベリニクが使われなくなり消滅していった事実を、彼は対外関係および経済的な一連の原因の複合により説明している。

国際関係という文脈でみた場合に重要なのは外国貨幣の浸透と利用の事実である。1865-1917 年にヴィリニュス古文書委員会証書集として刊行された資料の検討を行ったのはブレストの歴史家、E. V. モロズおよび V. I. ニキテンコフである。彼らが明らかにしたところによれば、ヴィリニュスに造幣局が開設された 1492 年にリトアニア大公国における貨幣流通の新しい時代が始まり、この新時代を通じリトアニアの鋳貨(リチブィ)、つまり5ペニャジに相当する半グロシ通貨に押されてプラハ・グロシが徐々に姿を消していった。ただしコパ(60 グロシないし 120 半グロシ)は計算単位として残った。15 世紀の末にクラクフ造幣局の活動が復活すると、ポーランド貨幣もリトアニア大公国に浸透し始めた。ポーランド・グロシはリトアニア・グロシの5分の4に相当し、ポーランドの金貨およびハンガリーのドゥカット金貨は 30 ポーランド・グロシに等しいものとされた。1529 年にはターレルも出現したが、これは 16 世紀末には 36 グロシに相当した。しかし市場には「完全な重さの古貨幣」と「完全な重さのない新貨幣」、つまりそれぞれ 26.4 リトアニア・グロシと 23.4 リトアニア・グロシに等しい貨幣が流通していた[74]。1565 年に商人は外国旅行および「金貨と小額貨幣」も含めターレルの使用が禁止された。このことは、すでにスペイン・ターレル(=60 グロシ)や半ターレル(フィリップ 2 世の名に由来するいわゆる「フィリプキ」)の出現という形ですでに危機現象が形成されつつあったリトアニア大公国の経済発展に影響を及ぼさずにはおかなかった。貨幣流通の危機はステファン・バトゥーリが行ったポーランド貨幣とリトアニア貨幣の統合改革により抑制されはしたが、自国通貨は経済の需要を満たすほど十分には供給されなかった。相変わらず 15 世紀と同じように「ポーランド金貨」の名で呼ばれ 30 グロシの価値をもつフローリン銀貨が使われていた。1532 年になると証書類にはルーブリ(リトアニアの 100 グロシに当たる計算単位)、グリヴナ(=48ポーランド・グロシ)、アルティン、ジェニガなどのモスクワの貨幣が登場してくる。これらのロシア貨幣がもっともよく言及されるのは、モギリョフの都市民のロシアへの旅行に関連してである[75]。以上のように、記録史料および地中などから発見された実際の秘匿貨幣などのよって判断するなら、16 世紀を通じ、一つの外国貨幣が流通の場から消滅すると別の外国貨幣がリトアニア大公国の中に導入され流通するということが繰り返されているが、それはこの国の対外交易の基本方向の転換を反映するものだった。

---

[70] Рябцевич В.Н. Нумизматика Беларуси. Мн., 1995.

[71] Бектинеев Ш.И. Проблемы денежного обращения Великого княжества]Литовского в XVI в. (До Любдинской унии 1569 г.) // Навукова-практычная канферэнцыя, присвяаная 900-годдзю Пінскаю Май 1997. Пінск, 1997. С. 19-20.

[72] Бектинеев Ш.И. Обращение рубля на территории Баларуси до Люблинской унии 1569 г. // Беларусь: гістарычны лес народа і культуры. Мн., 1995. С. 103-106.

[73] Бектинеев Ш.И. "Корабельники" в Великом княжестве Литовском // ГАЗ. № 11. Мн., 1997.С744

[74] То же происходило и на русском денежном рынке, обрезание и порча монет вызвали реформу 1534-1537 гг., известную как реформа Елены Глинской (Мельникова А.С.

[75] Никитенков В.И., Никитенкова П.П. Денежное хозяйство на белорусских землях в конце XV-70-х годах XVI века // БересцейскI хранограф. Вып. 1. Брэст, 1997. С. 13-17; Мороз Е.В., Никитенков В.И. Акты Виленской Археографической комиссии как источник по истории денежного хозяйства Беларуси в XIV-XVII веках // БересцейскI хранограф. Вып. 2. Брэст, 1999. С. 287-295.

支配者たちの政策はしばしば自分たちの国を含む隣接諸国に人口学上の危機をもたらした。このことを非常に説得的な形で明らかにしたのがリヴォニア戦争の主戦場だったベラルーシの最東部に関する A. N.ヤヌゥシケヴィチの研究である。ヤヌゥシケヴィチはこの点をポロツク地方の例で示した。1570 年頃におけるポロツク地方では以前の農村居住地のうち住民が住んでいたのは 31 パーセンドだけで、残りは程度はさまざまであるが無主地化していた[76]。とはいえ 16 世紀の人口学的危機は民族絶滅といった水準までには至らなかったと思われる[77]。

リトアニア大公国内の個々の地域での人口増加に関する考察もまた重要である[78]。ポロツク地方の占領およびそれに伴う住民移動と結びついていたと思われるのが、ヴィリア、ネマン、ベレジナ川の上流地域における小都市（メステチコ）の急激な増大で、この現象は主として 16 世紀後半に生じた[79]。しかしベラルーシの研究者たちはこれら小都市の増大を戦争による人口移動と結びつけることはせず、こうした集落が発生する社会経済的前提の解明だけに注意を向けている[80]。例外は B. I. シドレンコの場合で、この著者は対外経済要因の作用を 16 世紀におけるモギリョフ市の経済成長の一因とみなしている。都市民の参加なしに 1526 年に建設され要塞だったモギリョフは 1581 年にはその機能の有効性を証明してみせることになった。ロシアのツァーリ軍がポロツク市を占領したあと、この町の人口は増大し根本的な変化をとげた。ポロツクの貴族はモギリョフに移住し、この地で 189 スルージバと 250 ドィム分の村々を受領している[81]。しかし決してどこでもこうしたことが起こったのではない。全ルーシ公国との国境に近い場所にあったムスチスラフスコエ公国の諸都市やクリチェフスカヤ郷などは 16 世紀の前半の間に住民を失った。ポロツクの場合と同じくツァーリ権力がここでは土地の住民をあてにしなかったため、住民は戦闘で死んだり捕虜として追い立てられたからである[82]。

16 世紀リトアニア大公国の文化的結びつき

筆者の見るところ、リヴォニア戦争期におけるロシアとジェチ・ポスポリタとの文化的関係の研究がこの先まったく何の可能

---

[76] Янушкевич А.Н.Першая інфлянцкая вайна 1558-1570 гг. і яе уплыу на развіцце сацыяльна-палітычных працэсау у Вялікім княстве Літоускім. (Первая Ливонская война 1558-1570 гг. и ее влияние на развитие социально-экономических процессов в ВКЛ).Мінск, 2001.

[77] Впрочем введенное Г.Н. Сагановичем применительно к середине XVII в. понятие этноцида еще нуждается в дополнительном изучении, в том числе и сравнительно-историческом

[78] На эту проблему еще в конце 20-х годов XX в. обратил внимание В.М. Игнатовский, обративший внимание на бегство населения из восточных регионов в южные украинские земли, происходившее в начале XVI в. в условиях русско-литовских войн (Ігнатоускі У.М. Кароткі нарыс гісторыі Беларусі. 5-е выд. Мн., 1991. С.96).

[79] Бохан Ю.М. Аб мксцы мястэчка у стктуры гарадсіх пасяленняу XV-XVIII сс.ст. (на матэрыялах мястэчек вярхоуяу Віліі і Неманскай Беразіны)// ГАЗ. Ч.1. Мн., 1993

[80] Соркіна І. Спроба перыядызацыі гісторыі мястечек Беларусі (15-пачатак 20 ст.) // Гістарычеы альманах. Т. 7. Городня 2002. С.101-102.

[81] Сідарэнка Б. Магілеу у сістеме узаемаадносін... С. 32.

[82] Сидоренко Б. Города Восточной Беларуси (Кричев, Могилев, Мстиславль, Пропошеск) в в военной стратегии Великого княжества Литовского первой четверти XVI века // Беларускі горад у часе І прасторы... С. 101-109.

性もないというわけではない。ポロツクが占領されてロシア・ツァーリ国に編入されていた間に、例えばポロツクで製造されるタイルの紋様に変化があらわれる[83]。この時期のポロツクで作られたタイルにはロシア・ツァーリ国の国家シンボルである双頭の鷲が登場するが、これはむろんロシア支配時代の建設活動と結びつくものと考えられる。しかしここで製造されるタイルの双頭の鷲は、相互によく似かよっているロシアの双頭の鷲とは外観もスタイルもかなりはっきり違っており[84]、鷲の描き方のやや風刺画風の姿は、これを大量に制作していた職人たちの気分を結びつけて解釈したくなる。双頭の鷲の起源はエキゾチックなものだったにせよ、17 世紀にはロシアでもごく普通の装飾紋様になっていたからである。とはいえ、著者の空想は少々度が過ぎているかも知れない。

完全には実現していないものの、両者の文化的関係を研究する可能性を開くものに遺言状＝テスタメントの研究がある[85]。例えば以前に引用した 1590 年のヤン・グレヴォヴィチの遺言状には、二人の下僕ゴルシコフスキとラーシの国外での教育費用の支払いが述べられている[86]。ロシアの文化的発展に及ぼしたベラルーシ人の役割という一時は忘れ去られていたテーマには、16 世紀ではなく 17 世紀についてであるが、A. A. トルゥソフと V. P. グリツケヴィチが注意を向け、このテーマの変わらぬ重要性を強調している[87]。

リトアニア大公国とりわけポロツクとロシアとの非常に独特の形の文化的繋がりの一つに、イワン雷帝によるポロツク占領の後に、ツァーリ権力に仕える印章学イデオローグたちがベラルーシ都市のエンブレムをロシアに取り入れた事実がある。A. トロフィモフは雷帝の大国家印章に描かれている"колюмн"の起源を研究して、これはすでに 1463 年以来、鑞の韻書で使われてきたボロツクの最初の紋章だとしている[88]。ポロツク колюмн の歴史に関する彼の興味深い解釈はこのテーマに関する I. グラリャの説を補完するものとなっている。

活発に行われている 16-17 世紀諸要塞の考古学もロシア統治時代の北東ベラルーシにおける木造要塞建築の研究は事実上放棄している。要塞ソコルとウプラの女性研究者である I. V. ガネツカヤは[89]、ここにロシア軍による建築物が造られたことは記録史料によって確かめられるにもかかわらず、残念なことにそうした建築物の痕跡があるのかないのかということさえまったく言及しないのである。

国内諸都市の 16-17 世紀の文化層を数多く発掘しているベラルーシの考古学者たちは、輸入商品とりわけライン地方から入ってきた陶器についていくつかの報告を行っている[90]。

---

[83] Здановіч Н.І. Полацкая кафля канца XVI-XVII ст. // Гісторыка-археалогічны зборнік. № 12. Мн., 1997. С. 103-126, особенно С. 106.Рис. 2,10. С. 111, 119. Ср. Паничева // КСИА. Вып. 160.

[84] Орлы на полоцких "кафлях" имеют узкое и длинное туловище и крылья с растрепанными по отдельности крыльями

[85] Общую характеристику шляхетских завещаний дали Н. Слиж и М. Гордеев (Сліж Н., Гардзееу М. Шляхецкія тэстаменты 16-пачатку 18 ст. // Гістарычны альманах. Т. 3. Гародня, 2000. С. 90-iiiiiii

[86] Тастамент Яна Глябовіча. С. 65.

[87] Трусау А.А.Беларусы у Маскве XVII ст. // Гістарычная навука І гістарыная фдукацыя у рэспубліцы Беларусь. Новыя канцэпцыі І падыходы. Ч. 1. МН., 1994. С. 75-80; Грыцкевіч В.П. Беларускія лекары у Маскоускай дзяржаве XVII ст. // Магілеуская дауніна. Маг., 1997. С. 5-8.

[88] Трофимов А. Вариант герба Полоцка с большой государственной печати Ивана IV // Беларускі горад у часе І прасторы... С. 244-250.

[89] Ганецкая І.У. Крынеіцы па гісторыі беларускіх замкау // БГЧ. 2003. № 9. С.17-21

[90] Марзалюк І.Магілеу у XII-XVIII стагоддзях.Людзі І рэчы. Мн., 1998. С. 59 См. такжн

＊＊＊＊

ベラルーシの対外関係史研究者たちがまだ利用していない史料的な宝庫がまだ残されていることは言うまでもない（ポーランドの多巻本シリーズ Elementa ad fontium ediciones はなお彼らの射程範囲外に置かれたままである）。ベラルーシとロシアの間の学問的交流もより活発化しなければならない。モスクワやサンクト・ペテルブルグを中心にさまざまな機関が管轄するロシアの古文書館の関係史料のベラルーシの研究者たちによる請求もこれまで十分に行われていない。ベラルーシにおける同僚研究者たちはロシアの研究者の仕事を十分に知っていないし、同じことはロシアの研究者たち（かくいう私も含めて）のベラルーシ史学に対する関係についても言える。

隣接する国家の領域にかかわる政治的・地理的な史料用語、具体的にはモスコヴィア、モスクワ公国、モスクワ国家といったタームを全ルーシ公国ないしロシア・ツァーリ国をさす言葉として使うことには疑問の余地がある。まったく同じことは、しばしばベラルーシ・リトアニア国家とかベラルーシ・リトアニア国（ジェルジャヴァ）の名で呼ばれる（特に V. I. ボブィシェフの著作で然り）リトアニア大公国についても同じことが言える。それぞれの国の自称、したがってまたそれぞれの国の政治的エリートやその国の住民の自己認識を無視することになれば、ロシア・ツァーリ国とリトアニア大公国とをリヴォニア戦争へと導くことになった主要かつ中心的な対立点の理解を困難にし、ベラルーシの歴史のリトアニア大公国の歴史とのすり替えやその反対のすり替え、あるいは歴史の神話化へと導くことになり、また反対に 16 世紀東欧における対立関係において果たしたベラルーシの役割の過小評価をもたらすことにもなるのである（ポーランドの研究者 G. リュレヴィチの最新のモノグラフィーを参照されたい）。しかしそれにもかかわらず、ベラルーシとロシアの学者の間には、例えばスタロドゥプ戦争に関し（M. M. クロムと B. I. シドレンコ）、あるいはリヴォニア戦争の時代区分やその意味に関して（A. N.ヤヌシケヴィチと A. L. ホロシケヴィチ）問題関心や幾つかの結論で一致する事態も生まれてきている点を特筆しておきたい。

20 世紀末から 21 世紀初めのベラルーシ史学は中世の国際関係にかかわる研究分野で急速かつ成功裏に発展をとげているが、この研究分野もベラルーシ史学のなかにある純学問的な潮流と、神話形成的な潮流との双方の影響を受けている。しかし純粋に学問的なアプローチが優位を占めていることは疑いない。それを保証したのはベラルーシ国立大学教授 A. A. ヤノフスキーが国際関係史分野におけるベラルーシ史学の創始者となりまた事実上の中心となったことである。彼は 16 世紀東欧の転換点となったリヴォニア戦争を含む戦争と外交関係史の全体的な課題を提起し、この分野の主導的な専門家たちを育成した。彼のもとで育ったのが V. I. コノノヴィチ（学位論文 1997 年）、V. I. ボブィシェフ（学位論文 2001 年）、それに A. N. ヤヌィシケヴィチ（学位論文 2001 年）である。現在このようなテーマの研究は NANB 歴史研究所のなかでも行われている。しかしソヴェト時代の典型的シェーマの決定的な見直しが行われた 2002 年の学会「ベラルーシの対外政策—その歴史的回顧—」のあと、歴史学界のこのテーマに対する関心は少しく薄らいだ。雑誌『ベラルーシと世界』の刊行は止まり、このテーマを扱う論文の数もだんだん少なくなってきた。おそらく国の孤立化政策がこの分野にも影響を及ぼしているのであろう。関心が薄らいだもう一つの原因としては新しい史料の刊行が十分に行われていないこともある。しかし G. Ia. ゴレンチェンコの指導で提出された O. I. ジャルノヴィチの学位論文が示しているように、新たな史料があれば再びこの分野の研究に命を吹き込みことは出来る[91]。

2001 年のリガにおける学会で筆者が提起しポーランドやスウェーデンの学者たちが支持してくれたことであるが、リヴォニア戦争に関するベラルーシ、ロシア、ポーランド、ドイツおよびスウェーデンの共同研究プロジェクトを実現することが、この

Левко О.Н. Средневековые территориально-административные центры Северо-Восточной Беларуси. Мн., 2004.

[91] Дзярновіч А.И. Дакументальныя крыніцы па гісторыі палітычных адносін Вялікага княства Литоускага і Лівоніі у канцы XV-першай палове XVI стст. (сістэматызацыя і іактавы аналіз). АКД. Мн., 2004.

テーマの前進をはかるうえではもっとも意にかなっているであろう。